



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	附属図書館。一 農学校・農科大学の図書館。二 北海道帝国大学の図書館。三 戦後復興のころ。四 新図書館の建築。五 図書館改革の努力。六 教養分館。あとがき。付録。年表
Citation	北大百年史, 部局史, 1343-1376
Issue Date	1980-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29994
Type	departmental bulletin paper
File Information	bukyokusi_p1343-1376.pdf



附
属
图
书
馆

目次

一 農学校・農科大学の図書館	1346
二 北海道帝国大学の図書館	1351
三 戦後復興のころ	1355
四 新図書館の建築	1358
五 図書館改革の努力	1362
六 教養分館	1367
附属図書館分室—教養分館の落成—利用者の激増—指定図書・参考図書群の充実—分館に対する 教官の関心及び利用度の高まり—教養分館増築工事完成	
あとがき	1371
付 録	1372
一 歴代館長・教養分館長・司書官・事務(部)長一覧	
二 蔵書印	
三 蔵書数	
年 表	1375

一 農学校・農科大学の図書館

「書籍ハ生徒ノ器具ニシテ器具無リセバ彼等モ大業ヲ成ス能ハザルナリ」
W・S・クラーク(札幌農学校第一年報より)

一八七六年(明治九)八月に開校した札幌農学校は、その前年東京から移転した札幌学校(開拓使仮学校の改名)が農学の専門学課を教授する高等教育機関に発展したものであった。このため、当初の校舎及び備品等はすべて札幌学校から引き継がれた。札幌学校の講堂(以前の御雇外国人の合同官舎を改造したもので、農学校時代には北講堂と呼ばれた)には、一八七六年七月現在で洋書一七八七冊、和漢書四三六二冊の「書籍室」が設けられていたので、これもそのまま農学校の「書籍室」となったわけである。農学校の授業が進むにつれて、ここには開拓使各課から移管された図書や、主として英米に発注された大学用教科書、参考書などが続々入荷し、一八七七年の蔵書は洋書三七三四冊(うち三三一冊は英書、和漢書五一〇〇冊(二五〇部)に増加している。

開校から四カ月ほどたった一八七六年十二月には、北講堂と寄宿舎の間に延べ三〇坪(九九平方メートル)ほどの木造証葺二階建ての「書籍庫」が新築された。これが独立の建物を有する図書館の起源であるが、前年の設計に基づいて建てられたこの書籍庫にクラーク教頭ははなはだ不満であったらしく、調所校長に防湿・採光・書架配置についていろいろと改善を要望している。当時の校舎がすべて洋風のしよしやな建築であったのに比べると、この書庫は写真でみてもはなはだ見劣りのする貧相な建物である。しかもこの「書籍庫」には閲覧室はなく、雑誌及び新聞の縦覧

所としては別に北講堂内に「読書房」が設けられていた。

書籍庫からの図書の貸出は、毎日午後一時から二時までの間に行われ(のちには和漢書は毎木曜、洋書は月水金に制限)、貸出冊数は「課業書ヲ除クノ外教官ハ各々四巻、生徒ハ各々一巻以上ヲ一時ニ借用スルヲ許サズ。且ツ何レモ四週間以内ニ之ヲ返納スベシ」と定められていた。課業書というのは教科書のこと、これは各科目とも学期の始めに各人に貸与され、学期末には回収された。「読書房」の場合は、開室時間は毎日午前八時から日没までであった。

農学校の初期のころは、本科の講義はすべてアメリカ教師により英語で行われたから、収書中に英書が多かったのはもちろんであるが、農学校はリベラル・アーツを重視するマサチューセツ農科大学のカリキュラムをモデルとしていたので、その蔵書には自然科学の専門書のほか、哲学・文学・歴史・政治などの教養書も数多く含まれていた。後年農学校から専門内外の分野で国際的に活躍した人材が輩出した原因の一つを、これら図書館の蔵書内容に求めることもできるかもしれない。和漢学は主に予備科において教授されたが、この方面でも基本的な書籍がかなりよくそろえられていた。

当初、図書館を管理したのは予備科の教師たちである。彼らは「典籍」、「書籍係」などと呼ばれ、最初の「典籍」は洋書部が井川冽(英語)、和漢書部は長尾布山(和漢学)であった。その後大島正健や山崎益がそれぞれ洋書部、和漢書部の「書籍館主管」となり、明治二十四年から三十年までは単独の「書籍館主任」として本科の新渡戸稲造が就任した。彼をもつて最初の図書館長とみなすことができるであろう。図書の整理や出納は、一、二名の雇員によって行われていたようである。

一八九〇年(明治二三)には蔵書も一万八〇〇〇冊を超え、書庫も手狭になったので、早くも書籍館の新築要望書が当時農学校を管轄していた北海道庁長官に提出された。これは一万円余をもつて耐火構造の図書館を造り、農学校の



移転直前の札幌農学校図書館（1903年）

図書のみならず道庁の旧記録類をも永久に保存する計画であったが、実際には書庫の修復と増築のためわずか三〇〇円の支出が認められたにすぎなかった。しかしともかくもこれによって同年十一月、農学校の書籍館は初めて二三坪の閲覧室と事務室を備えることになり、ようやく図書館らしい形態を整えたのである。

図書の検索は、まだカード目録が採用されていなかったため、手書きの冊子目録によらねばならなかった。この目録は図書の増加とともに幾度か改訂され、一八八八、八九年には活版で洋書目録と和漢書目録が印刷されている。書庫における図書の配列はおおまかな分類と受入番号の組合わせで行われていたようである。新築の閲覧室は、休日を除き午後一〜四時に開かれ、貸出は出納式によっていた。新着図書は一週間、新聞・雑誌は四週間閲覧室の一定の場所に備え付けられていたが、明治二十年代の図書購入冊数は以前と比べると著しく少なかった。これは農学校に廃校の危機をさえ意識させた慢性的な北海道庁の予算削減によるものであったろう。

一八九五年（明治二八）四月、農学校が文部省直轄学校となった際に「校務規程」が制定され、図書館は教務部の一掛となった。それとともに「書籍館規則」も改正されたが、従来のものとの大きな違いは、「各学科実験上必要ナル書籍ハ主管教官ノ申請ニ由リ其實験室ニ備フルコトヲ得」として、図書の教室備付を認めたことである。これは書庫の狭隘さにも関係があるが、それよりはむしろこのころから始められていた授業内容の専門化と専攻別による実

験・演習^{ゼミナール}の導入によって、農学・農芸化学・植物病理・農業経済などの各教室が圖書を身近におく必要を感じたためであった。このようにして圖書の分散方式が芽生えたのである。

一八九九年（明治三二）三月には「処務規程」が改正されて、図書館は博物館や植物園とともに教務部から離れて独立した施設となり、「館長」がおかれることになった。このとき館長となったのは、前年から教務部図書館掛長の地位にあった原十太教授で、彼は博物館長も兼任した。原は東京帝国大学大学院在学中に農学校教授として招聘された新進の動物学者であったが、斬新なアイデアの持ち主で、彼の館長時代は図書館業務近代化のうえでも画期的な時期であった。同年五月、原館長は当時札幌郵便電信局に勤務していた同志社出身の田中稔をかなり無理をして図書館に迎えたが、札幌農学校図書館がデューイの図書館学校規則（Library School Rules）を用いてカード目録の作成を始めたのはその後まもなくのことである。さらに一九〇〇年九月には従来の大まかな分類法を廃して、デューイの十進分類法も採用された。デューイの分類は一八七六年に最初の要項が発表され、当時はアメリカにおいてさえようやく市民権を獲得したばかりであった。このような時期に原と田中がどのような経緯で和洋書ともデューイによる分類を採用したかつまびらかではないが、恐らくは原館長の熱心な支持によって田中稔が欧米の図書館学を研究した結果によるものであろう。学生時代から田中と親しかった予科教授の有島武郎は、のちに彼のことを回想した文章の中で、「田中君は」図書館取扱に関する著書と定刊物とは細大漏さず眼を通す事に心懸けました。英語の智識だけでは不満足だと云ふので、独逸語と仏蘭語^{フランス語}の研究にも熱中して大体に通ずるだけになって居りました」と書いている。

さて、一九〇三年（明治三六）六月、札幌農学校は北一〇二条から現在のキャンパスに移転した。その際に新築された図書館は瓦屋根、白壁の美しい建物で、そこには職員閲覧室・学生生徒閲覧室・出納室・事務室のほか四万五〇〇〇冊収容のレンガ書庫が備えられていた。天井の高い学生生徒閲覧室は広々として一〇〇席ほどの座席があり、これ

は大正五年に中央講堂ができるまでは、入学式や卒業式のほか、各種の催し物や全学的行事の会場として使用された。

図書館の移転とともに、九月には「図書館規程施行細則」が定められ、その第一条には各教室への無制限・無期限の圖書貸出が規定された。これは独立した各科講堂の新築からみて自然な成り行きであったともいえる。これに対し学生生徒への貸出は、「已ムヲ得ザル場合ニ限り」二冊に制限されたが、本科四年生は卒論作成のためにとくに書庫内検索が認められた。閲覧室の開室時間は、当初は電燈の設備がなかったため、冬期の日没に合わせて午後四時までであったが、一九一四年（大正三）九月に電燈がつけられると、翌月には「施行細則」を改めて午後九時までの夜間開館が行われることになった。閲覧室の照明にはすらんを形どった華麗なシャンデリアがとりつけられた。

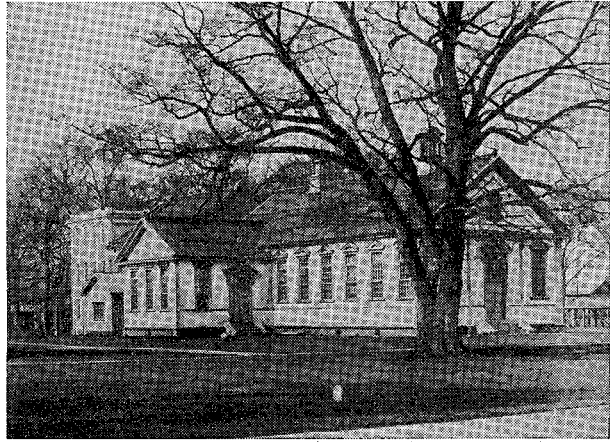
一九〇七年（明治四〇）、札幌農学校の大学昇格に伴って図書館も東北帝国大学農科大学図書館と改称した。その前後から図書館の蔵書を豊かにするために、物故者もしくは功労者の事蹟を記念して、同窓会や関係者の寄金により個人の名前を冠した文庫を寄贈することがひんばんに行われている。図書館自体も同窓生に広く呼びかけて著作物の寄贈を求め、また『文武会々報』に定期的に「図書館増加目録」を載せるなどようやく図書館のPR活動も行われ始めた。一方、学生や生徒たちの図書館に対する意見も聞かれるようになったが、一九〇七年の『文武会々報』に載せられた一利用者の感想は、当時の図書館の状況をしのばせて興味深い。「一度図書館を訪ふ者あらば必ずや三度喫驚せん。第一其閲覧室の一枚付属の図書館としては広大にして且清潔なることは也。第二設備の大に比して蔵書の甚僅少なる事は也。第三閲覧室の喧騒にして其学生控室なるかを疑はしむる事は也」。また一九一六年の同誌に載せられた「嗟呼！ 図書館！」と題する投稿も、七項目の図書館改善案をあげて、課業外の良書の購入・教室備付圖書の随時返却・日曜開館などを要望している。確かにこのころになると専門書は教室に貸し出され、教養書も以前のように購入されず、圖書の館外貸出も厳しく制約されたから、図書館は学生たちを満足させなかったようである。彼らは読

書の嗜好を満たすためには、図書館よりは当時繁昌していた貸本屋に足向けることが多かったといわれている。

二 北海道帝国大学の図書館

一九一八年（大正七）東北帝国大学農科大学図書館は北海道帝国大学図書館となり、一九二二年には勅令第二五七号によって図書館を「附属図書館」と改称し、官制上の館長その他の職制が定められた。このときの館長は農学部教授高岡熊雄であったが、高岡は一九〇五年（明治三八）十一月札幌農学校の図書館長に就任以来、一九三三年（昭和八）十二月南鷹次郎の後を受け総長となるまでの間、実に二八年もの長きにわたって本学図書館の充実に努めた。彼は一九一二年（明治四五）には「区勢調査ニ表ハレシ札幌区民ノ読書力」を著わし、一九二一年（大正一〇）十月の札幌区会では庁立図書館設立の必要を述べるなど、社会教育機関としての図書館の発展にも関心をもっていた。

大学の規模の拡大とともに、農学校以来の図書館では手狭となり、このころから盛んに増築が行われている。一九二二年六月、鉄筋コンクリート三階建て七二坪の書庫増築工事が起工された。一九二五年九月には木造平屋建ての雑誌閲覧室と事務室（六〇坪）が、一九二九年十月には製本室（二八坪）、印刷室（七・五坪）が、さらに同年十一月には新聞閲覧室（二二・五坪）がそれぞれ新築された。その後、一九三四年十一月にもコンクリート三階建て二四坪の書庫が増築されている。しかし、なお総合大学の図書館としては著しく貧弱な図書館であることは否めなかったで、昭和初年から幾度も図書館新築の計画がたてられ、一九三七年（昭和一二）三月には、地上三階、地下一階延べ四三・一六坪、総工費一〇〇万円の大規模な図書館の建設計画が決定した。だがこの年勃発した日中戦争のためこれはついに実



昭和初年の図書館全景

現をみる事ができず、大学にふさわしい図書館をもつためには、一九五八年（昭和三十三年）起工の現在の本館新営工事をまたなければならなかったのである。

一九二六年（大正一五年）勅令第一七八号をもって、附属図書館に司書官一名が置かれることになり、柴田定吉が任命された。柴田は一九〇三年（明治三〇）、浦河郡荻伏の小学校を卒業し、田中稔の紹介で札幌農学校図書館に勤めた。勤務のかたわら北海英語学校夜学部に学び、英語、漢文、数学などを修め、同時にフランス語やドイツ語をも外国人から学んだ。現在、図書館に所蔵する古地図、古文書をはじめ貴重な資料の蒐集は彼に負うところが多いという。また郷土史に関する論文も数多く残している。一九四二年（昭和一七）には、日本図書館協会から図書館事業功労者として表彰された。一九三二年（昭和七）五月には高倉新一郎（農学部助手）も司書官を兼任することとなり、一

九四六年三月司書官制度が廃止されるまでの間、図書館には二人の司書官が存在した。

本学が総合大学となり、学部が増設が続くとともに図書館資料も急増し、館員の採用が相ついで行われた。たとえば、一九二〇年から数年の間に、三城長二・土屋増・三上孝正・明石節孝・進昌三など、大正・昭和期にかけて図書館を動かしていく原動力となった人々が採用されている。なかでも、三城長二は閲覧係員よりなるデリバリー事務協議会を開き、館の内外にあって活発な活動をみせたが、惜しくも一九三二年三十歳の若さでこの世を去った。三城は

青年図書館員連盟に加わり、『図書館雑誌』や『書(図書館)研究』にもいくつかの論文を発表している。森清の「日本著者記号表」は、一九四八年(昭和二三)三城長二の「ローマ字日本著作表」をもとに、カッターの著者記号表二数式を踏まえて作成されたものであるといわれ、彼の死後四十余年たった今日でもその業績は高く評価されている。

この時期には、後年、図書館界の外で活躍した人々が、一時的にはあるが図書館に籍を置いており興味深い。一九二三年(大正一二)十月には朝倉菊雄(島木健作)が雇として採用され、翌年春、農学部農業経済学科の資料室に移っている。彼はなかなかの議論好きで、書庫の中で助手たちと、図書の整理についてしばしば大声で言い争っていたという。一九二八年(昭和二三)六月には、のちにロシア文学、フランス文学の翻訳や評論などで名声を得た神西清が図書館に勤務している。彼はその年の春、東京外国語学校露語学科を優秀な成績で卒業し、八杉貞利教授の推薦によって図書館に嘱託として勤めることになった。ところが、親しい友人たちに「ここは長く居る処ではない」と話していたといい、翌年の春、図書館を辞し東京に去った。彼の処女小説『恢復期』はこのころに書かれたという。当時図書館に採用になった人々の多くは道内出身の若者たちであったが、このほか特に英語以外の外国語に通じている慶応義塾や同志社、それに東京外国語学校などの卒業生を嘱託として迎えていた。だが、彼らのうちで図書館に腰をすえる者はいなかったようである。

一九二四年(大正一三)六月、現在の国立七大学図書館協議会の前身である帝国大学附属図書館協議会が発足し、一九二八年(昭和三)七月には第五次帝国大学附属図書館協議会が本学で開催された。その際、九州帝国大学より「統一目録法及ヒ標準分類法ノ編制ヲ本協議会ニ於テ着手シテハ如何」という議題が提出された。若干の紆余曲折をみたが、一九三六年(昭和一一)「和漢書目録規則案」が作成され、北大では一九六〇年(昭和三五)の「日本目録規則一九五二年」採用まで、この目録規則を使用していたようである。このころからすでに帝国大学図書館間において相互貸

借が実施されていたようであるし、休暇中には北海道に帰省した他大学の学生が本学図書館を利用することも認められていた。試験時期になると日曜日でも開館され、夜九時まで利用することができた。辞典類や指定参考図書は接架式をとり、教授・助教授・講師・本科三年目学生については書庫内検索が許されていた。館外貸出冊数は、教授・助教授・講師は一〇冊、書記・雇員は二冊、学生（館長の許可）は二冊で、ともに貸出期間は一カ月であった。図書閲覧票は黄色と赤色の二種が用意され、一般学生と本科三年目学生とが区別されていた。

各種の冊子目録も編まれるようになり、一九二五年（大正一四）ころから『北海道帝国大学附属図書館増加図書目録』が毎年刊行され、一九三三年には『北海道帝国大学欧文雑誌綜合目録』が、翌年には『北海道帝国大学予科図書目録』がそれぞれ刊行された。本学関係者やほかからの図書の寄贈・寄託もしばしば行われ、一九三五年九月、各帝国大学へ図書の寄託に関する規則や内規の照会を行っている。この時期に寄贈・寄託された主なものには、新渡戸稲造、内村鑑三、南鷹次郎、宮部金吾、佐藤昌介など、初期の札幌農学校の卒業生によるものが多い。

それでは、当時の学生は図書館をどのようにみていたのであろうか。高倉司書官は一九三三年、「学生より図書館へ、図書館より学生へ」というノートを備え、学生の図書館に関する意見を求め、それに回答を加えて、学生の意思を図書館運営に反映させようと努めた。それら意見の多くは新たに図書を購入してほしいという希望であるが、なかには新着雑誌がいつも書架にないので貸出禁止にしてはとか、目録で確認できた図書が教室に貸し出されていて利用できないという苦情も含まれていた。また日曜開館問題なども繰り返して話題にのぼっている。

一九三五年八月二十一日から五日間、本学講堂において文部省主催の図書館学講習会が開かれた。講師には本館からも館長の上原徹三郎をはじめ、柴田定吉が「学校図書館の経営について」、高倉新一郎が「農学名著解題」をそれぞれ講義している。大正末年ころには館員による研修と親睦の団体「楡影会」が組織され、読書会やハイキング、

スキーなどのレクリエーションが催され、この会は今日まで続けられている。一九三一年三月には、ガリ版刷り二ページ程のもので『週刊榆影タイムス』が発行され、一年間近く続刊されたりした。

一九四一年太平洋戦争が始まるとともに洋書の輸入ができなくなり、和書も出版統制のためしだいに入手が困難となった。それ以前から思想取締は一段と厳しくなり、文部省からは学生の目に触れさせてはいけない図書として、「禁止刊行物目録」や「輸入禁止外字出版物一覧表」などのリストが送付され、それらを別置するようにとの指示がなされていたのである。戦火の影響は単に図書館資料のみでなく図書館員の上にも及び、一九三九年（昭和一四）ころから職員の中で入営する者もみられるようになった。戦争も末期になると学生は学業を短縮され戦争にかりだされていったから、後に残ったのは女子職員の姿と、利用者のいない虚ろな図書館の建物のみであった。北海道では本州のような空襲の被害も少なく、蔵書の疎開も行われなかったのがせめてもの幸いであった。

三 戦後復興のころ

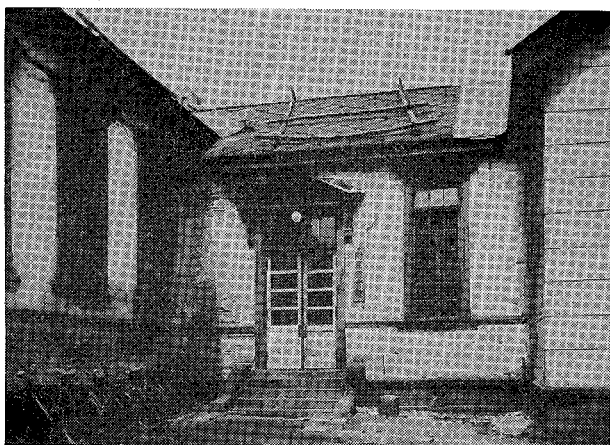
一九四五年（昭和二〇）夏に戦争が終わり、兵役や勤労動員から解放された学生たちが徐々に学園にもどってきたとき、彼らを迎えたのは戦時中に放置されて荒廃した校舎と貧しい設備であった。寒さの厳しい北海道では冬の石炭不足も深刻で、戦後最初の冬は冬休みを延長し、翌年には学生の炭砒出動さえ行われた。図書館の場合はこれに加えて暖房装置の老朽化のためなお数年間はスチームさえ通らず、わずかなストーブの余熱で長い冬を耐えねばならな

かったのである。

敗戦後の社会混乱の中で食糧難とインフレの物価高に苦しんでいた学生たちが、精神の糧を図書館に求めようとしても、その蔵書は古ぼけた施設と同様に貧弱で、そこには彼らの期待を満しうるような書物はごくわずかしか見いだせなかった。一九四六年には占領軍の意向によって文部省から「宣伝用刊行物没収」に関する通牒が出されて戦前の国体思想や軍国主義的な文献が書架から除去され、翌年には米国教育課程文庫が北大にもおかれたりしたが、それらは当時の学生たちにとっては無縁の措置にすぎなかった。

戦後の図書館にとっての試金石は、法文学部と教養部の設置であったといえる。永年の北海道民の要望にこたえて一九四七年に急造された法文学部は、設備費・図書費のすべてを地元で負担せねばならなかったが、敗戦の混乱期にあつてはこのことは困難であつた。慢性的な図書飢渴の中にあつて法文学部の教官と学生たちは、図書館や戦前において北大で唯一の文科系であつた農業経済学教室の資料を可能な限り利用したのである。もともと自然科学系大学に属していたこの図書館の資料がいくらかでもその役にたったのは、将来の可能性を予見して以前から人文社会科学の基本図書の充実にも留意してきた先人たちの賜であつた。しかしこれらの資料も多くは教授たちに貸し出されて、学生たちは卒論の作成ばかりか日々の学習にもこと欠いたといわれている。

一方、これまでの旧制予科に代つて一九四九年に設立された教養部は、一九六三年まではクラーク像周辺の農学校・農科大学以来の旧校舎を使用し図書館にもっとも近かつたから、このころの図書館利用者の大半は教養部の学生たちであつた。しかし教養部だけで二〇〇〇人を超える利用者に比して、図書館閲覧室の収容人員は農学校のころとほとんど変りないわずか一〇〇〇人余にすぎず、それは総合大学の図書館と呼ぶには余りにも貧弱な建物であつた。さらに図書館ではこれら教養生の需要にこたえて乏しい図書費の大半を主として自然科学の学習書購入にあてなければ



壁もはげ落ちた図書館玄関（1962年ごろ）

ばならなかったから、専門書はおろか教養書の充実にもほとんど手が回らなかったのである。

法文学部の設立とともに図書館資料の充実が痛感されたので、一九四八年には諸部局から選出された委員よりなる図書館拡充委員会が設置された。だが法文学部の危機を訴えた学生たちの募金運動に刺激されて、この学部には事務局や北海道庁などから巨額の図書費が支出され、その後分離独立した文・法・経と教育の諸学部が専ら自らの図書資料充実に努めるようになると、図書館の存在は再びしだいに影が薄くなり、予算も定員もおきざりにされた感があつた。

さらに各学部図書館がおかれても、図書館はもはやこれらを調整する機能をほとんどもたなかったようである。このころの『北海道大学新聞』は図書館のことを「半身不随」とか「大学の盲点」とか呼んでいる。

戦後間もなくの一九四六年に「帝国大学官制」が制定され、これによって従来図書館におかれていた司書官・司書・書記の職種は文部事務官に統一された。その後人事院は「司書職級別明細書」の案を発表し、大学図書館員の専門性も戦前以上に認められるかにみえたが、これは図書館界内部にさえ異論があつてついに実現しなかった。そればかりでなく図書館職員は公務員試験の対象から除外され、協議採用による低い待遇に甘んじなければならなかったのである。このような中で一九四九年には北大図書館にも事務長制がしかれることになり、初代事務長には一九二六年以来司書官であつた柴田定吉が就任し、管

理・整理・閲覧の三掛がおかれることになった。このうち閲覧掛は多くが女子職員で、書庫の非衛生的な環境と過労のため肺結核に冒される人が少なくなかったという。

戦後は図書館活動の先進国であるアメリカから来日した顧問団や使節団などの勧告もあって、わが国の図書館事情改善の急務が認識され、一九五〇年には図書館法も制定された。大学図書館の遅れも痛感され、大学基準協会や文部省によって「大学図書館基準」や「国立大学図書館改善要項」などが作成されたほか、一九五四年には「全国国立大学図書館長会議」が結成され、これ以後国立の大学図書館が協力して図書館改善のための要望を政府に働きかけることになった。このような全国の図書館界の動きは北大にも反映し、一九五五年に改正された「図書館処務規定」の中には「インフォメーション・サービス」、「レファレンス」など近代図書館の用語が現われている。同年五月には文部省の特別機械購入費によりアメリカからマイクロ写真撮影機が購入され、全国のマイクロセンター一〇館の一つとして本格的な複写業務も始められた。一九五七年には「北海道大学図書取扱規程」を定めて本館及び部局図書室における図書整理の統一と調整を図ることになり、全学の図書業務における附屬図書館の役割が初めて明確にされた。とはいえこのような業務改善の推進のためには、まずその器である建物の改築が不可欠であった。

四 新図書館の建築

一九五五年ころには北大でも戦後の復興期が終わり、これから再建期を迎えようとしていた。当時は戦前の四学部

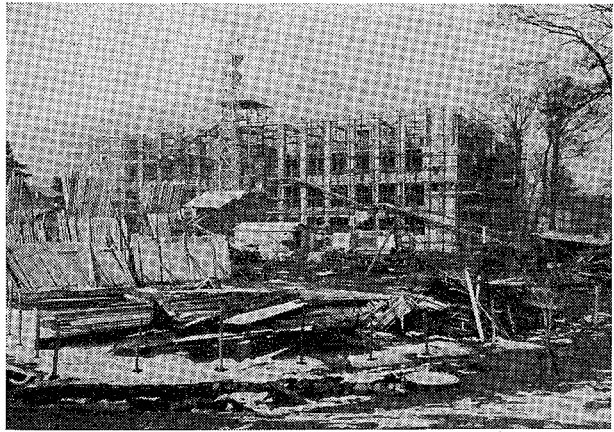
校以来の図書館も建築当初の耐用年数は三〇年といわれ、いまではその狹隘さばかりでなく建物としてもすでに寿命を過ぎていた。壁ははげ落ち、床も傾いて修理も追いつかなかったのである。

この年学長となった杉野目晴貞は、その抱負として校舎の全面的な増改築計画を明らかにし、図書館についても「明年度には総合大学のものでして恥しくない立派なものを新築の予定である」と語っている。実際には図書館の第一期工事は一九五八年八月末に当時の事務局裏のグラウンドで着工され、これは一九六〇年三月に完成した。しかしこの建物の大部分は当時窮迫していた教養部や人文系諸学部教官の研究室として作られ、閲覧室や書庫は第二期工事で以降に回されたため、同年中に新館に移転したのは総務・受入・目録の三掛で、閲覧業務はそのまま旧館で続けられた。

とはいえ新図書館着工は図書館職員にとって大きな励みとなり、そのころから図書館業務についての改善が熱心に論じられるようになった。一九五九年秋からは印刷カード実施のための目録記載統一について図書館と各部局図書室との討議が重ねられたが、これも従来みられなかった新しい気運であった。その結果翌年夏ころから全学的に同一のカード形式による印刷カード作成が行われ、本館と部局間の連絡も密になり始めたのである。

一九六一年には参考掛が旧館に新設され、図書館は五掛となった。この掛は文献調査、相互貸借、複写業務など図書館サービスの改善を目的として誕生したもので、設置早々から北海道地区大学図書館協議会の課題であった『北海道地区所在外国學術雑誌総合目録』の編纂に着手した。また閲覧掛も旧事務室を利用して開架図書室や簡易語学ラボラ室を設け、教養部教官に依頼して不十分ながら指定図書制度も始めた。

このころから図書館職員採用についても大きな変化がみられた。一九五八年に従来の協議採用が廃止されたのに伴い、一九六〇年から「国立大学図書館専門職員採用試験」が実施され、公務員試験に準ずる上級・中級合格者の採用



建築中の附属図書館新館

が始まったのである。この試験はその後いくらかの変遷をたどったのち、一九七二年には一般公務員採用試験の一部に組み込まれたが、ともかくもこれによって図書館員の身分はそれまでよりは安定したものとなった。

一九六四年には図書館の第二期工事として四階建ての閲覧スペースが完成し、六月十日から開架図書室、語学演習室（以上二階）、自習室（一階）など一部が開室した。そして翌年には六層の書庫も完成し、六月十七日には一般閲覧室で落成式が行われたが、二〇万冊余の図書の移転が完了したのは十月のことである。この新館は四、五階建ての延べ一万二五一九平方メートル、一〇〇万冊収容の積層式書庫をもつ建物で、当時は国内で最大規模の大学図書館建築と称されたが、館内の設備もデラックスで「行きとどいた照明と明るいムードの新図書館」として好評であった。特に農学校以来の古ぼけて小さな図書館に

なじんできた学生たちにとってこれは夢の実現であり、入館者は一挙に一〇倍に増加したのである。

ところすでに述べたように、旧館時代の図書館利用者の多くは教養部の学生たちであった。しかし一九六三年秋にそれまで図書館の近くにあった教養部が、そこから一キロほど離れた恵迪寮前グラウンドの新校舎に全面移転したことは、教養部生にとって非常な不便をきたしたばかりでなく、従来自然科学系学部はもとより人文科学系学部の教官や学生からも軽視されてきた図書館にとっても、将来だれを奉仕の対象とすべきかの問題を投げかけたのであ

る。新館が落成した一九六五年はまたこの四月に部課制がしかれ、図書館の機構上にも大きな変化のあった年であった。

大規模な建物が完成し、機構が改められたとき、北大図書館はこれをどのような理念のもとに運営してゆくかの早急な検討を迫られた。当時はすでに東大図書館の改造に先鞭をつけられて、全国的に「大学図書館の近代化」が叫ばれ始め、文部省も情報図書館課を新設して大学図書館改革に積極的に取り組み始めた時期にあたっていた。そしてこの夏北大図書館で開催された第一二次国立大学図書館長会議と研究集会でも、この問題は熱っぽく討議されたのである。このような中で北大では十月一日に評議会規程を改正して図書館長を評議員とし、同日付けで北大図書館改革の興望を担って館長に就任したのが法学部教授今村成和であった。

同年暮れから翌一九六六年春にかけて新図書館の書庫には、法学部図書の大半と文学部、経済学部図書の一部約一五万冊が搬入された。当初人文科学系学部の新築は図書館書庫を共同で利用するためこれを囲んで建てる構想もあったというが、実際にはこれは実現せず、法学部を除く諸学部は距離的な問題もあってその蔵書の大半を部局図書室もしくは研究室に分散する従来の方式によったのである。とはいえこれによって図書館と人文科学系学部図書の合体が部分的ながら行われることになった。このようにして新図書館は一九六六年四月十一日に一般閲覧室での図書の貸出を開始し、着工以来約八年にして全面開館にこぎつけたのである。同月十九日には大正七年以来の「図書館規程」を廃止し、新館の現状に相応する新しい「図書館閲覧規程」も制定されている。

五 図書館改革の努力

新図書館の全機能が動き始めた一九六六年の秋に、北大は開学九十周年を祝ったが、図書館は、新設の展示室のほか玄関ホールとクラーク会館を利用して、「北大沿革資料写真展」を開催した。また引き続き第一六次北海道地区大学図書館協議会、第四〇次国立七大学附属図書館協議会の会場館となつて、学内外にその生まれ変わった姿を披露したのである。しかし図書館の改革はまだ緒に付いたばかりであり、十月末に今村館長が古市学長に提出した「北海道大学図書館報告書」は、図書館の現状を分析しつつその近代化のためには北大図書館機構の再検討と図書事務の改善を図ることの急務を力説している。

新図書館は将来計画を検討するにあたり、まずその性格を規定しなければならなかった。今村館長は大学図書館の機能を総合図書館、研究図書館、学習図書館、保存図書館の四つに分類し、新図書館はそのすべてを兼ね備えるべきものとした。すなわち従来の学習、保存図書館的役割に加えて、全学図書館機構の連絡調整を図り、学術情報センタ―的機能を充実するとともに、人文科学系学部 of 図書を新館書庫に収納することによって少なくともその分野では研究図書館の機能をもたせようと考へたのである。彼は図書館の近代化には全学的協力の必要なことを認識し、これまでややもすれば形式的機関にすぎなかつた図書館委員会（一九六三年図書館拡充委員会を改組したもの）を重視して、ここで図書館改革の重要事項について実質的な審議を行うこととした。このようにして一九六七年一月、図書館委員会の中に「北大図書館機構検討小委員会」が発足し、その下部機構として「北大図書館事務改善小委員会」の



図書館一般閲覧室

活動も始められた。図書館報『榆蔭』が発刊されたのもこのころである。

機構検討委員会では中央図書館と部局図書室の関係が長期的視野をもって討議され、特に教養部、医学部、水産学部に分館を設ける必要性が関係部局の委員から強く要望された。また事務改善委も全学図書の利用や、従来はばらに行われていた附属図書館と部局図書室の事務改善について討議を始め、実務担当者の協議も行われた。このころから図書館職員の業務改善に対する意欲も著しくたかまり、多くのことが新規に着手されている。

たとえば、これまで他部局の図書利用に困難を感じていた利用者の不便を解消し、学内所蔵資料の相互利用を図るため、部局図書室の利用票発行が実現した。また図書整理の能率化を目指して業務合理化の取り決めもなされている。図書館では学内所蔵図書の所在調査を容易にするために、印刷カード実施以前に欠落していた十数年分の全学総合目録カード補充に着手し、これは数年のうちに完了した。学外との相互協力の面でも、文献複写のスピードアップのためゼロックス利用ができるよう規定改正を行い、公費による学外への複写申込みは本館が窓口になることとした。諸外国との紀要交換や文献複写の相互利用が軌道に乗ったのもこのころである。館内では開架図書室、語学演習室、北方資料室、複写室、印刷室の拡充が図られ、参考図書閲覧室には学術雑誌、判例資料、国連資料のコーナーが設けられ、以前の文系教官研究室跡は図書館利用者のための個室となり、旧図書館書庫の

大部分は全学の保存書庫となった。図書館の諸規則も整備され、一九六七年には「学内出版物の保存規程」も制定されている。以上のほかこのころには「収書通報」をはじめ各種の文献目録や雑誌目録が作成され、展示会もたびたび開かれた。このような改革の動きと並行して、他方ではいよいよ念願の教養分館や医学図書館の新築が本決りとなり、いずれも一九六八年中に着工された。

このように新館の開館以後積極的に進められ始めてきた図書館改善の努力は、一九六九年七月全国に吹き荒れた大学紛争のさなか革マル派学生による図書館封鎖によって一時的に中断された。以後約四カ月続いた封鎖の期間、図書館職員は未封鎖の学部に間借りしつつ離合集散したが、この間にもできる限りの仕事が続けられ、学外との文献複写相互利用などは諸部局図書室の協力によってほとんど中断なく続けられた。

封鎖による被害は、学生たちの自己規制によって図書やカードの散逸こそなかったものの、備品や設備の被害は著しいものがあつた。しかしバリケードや瓦礫の山をとり片付け、使用可能な書架やカード箱、机などを再配列し、図書の点検などをすませて復旧開館したのは、封鎖解除からわずか一カ月後のことであつた。そのためには職場を回復し、開館を待ち望む利用者の期待にこたえようとした館員たちの非常な努力があつたのである。

大学紛争後は、全国の大学において、これまでの大学のあり方について深刻な反省がなされ、大学改革の気運が高まつた。このため、今では図書館改善の問題も、大学改革との関連でとりあげられるようになり、一九七〇年六月には、国大協の中に初めて図書館改革のための特別委員会が設けられた。ついで十月に高野山大学で開かれた国立大学図書館協議会の第一七回総会の研究集会では、「新しい大学図書館像」特別委員会の報告が討議されたが、「大学図書館の未来像——その理念を中心に——」と題するその報告書は北大図書館の今村館長が作成したもので、大学改革の中における図書館近代化の方向を探索したものである。

同年十一月には北大でも「北海道大学改革検討委員会」が設置され、その1—2専門委員会は「図書館に関すること」を分担することになった。そしてこの作業を補助するために委員長（館長）の諮問機関として図書館員よりなる事務改善委員会も発足している。専門委員会は図書館改革検討の基礎データを集めるために、教官・院生・学部学生・教養部生ごとに図書館利用の実態と要望についてアンケート調査を行うこととした。これは一九七一年九月に実施され、データは大型計算機センターで集計のうえその分析と考察が翌年四月の評議会に「中間報告」として提出された。この中間報告をもとに専門委員会が今村委員作成の図書館改革案を討議し、その最終報告を評議会に送ったのは一九七三年七月のことである。当時の委員長は一九七一年十月に館長になった工学部教授福島久雄であった。

専門委員会報告は、アンケート調査及び図書館委員会を通じてよせられた各部局の意見をもとに附属図書館のみならず北大図書系業務の全体について、主として学内措置によって実現可能な改革の問題をとりあげている。ここでは自然科学系部局における図書分散の是正、人文科学系部局図書室の図書館との合体の推進が勧告され、附属図書館の総合図書館としての機能充実とともに北大図書機構における情報サービス網強化の必要が強調された。従来研究図書館を指向するものと考えられていた部局図書室の学習図書館的機能が見直されたのは、アンケート調査の結果である。これらの諸問題の解決はいずれも諸部局の協力を必要とするもので、その後の進行は必ずしもはかばかしくないが、一九七五年四月には法学部図書室の附属図書館との合併が実現し、その後も他の人文科学系諸学部との協議が続けられている。

図書館改革との関連でここにつけ加えておかなばならないのは、一九六〇年代の後半から実施されてきた欠員不補充、さらに定員削減の問題である。大規模な建物ができて人文科学系学部 of 図書をも収蔵し、あらたな業務がつぎつぎに着手されて、サービス改善に乗り出したばかりの図書館にとって、この措置は改革の中止を命ぜられるに等しか

った。一九六八～七六年の三次にわたる図書館定員の削減は一〇名に及んでいるが、定員のつかない教養分館の新設を考慮に入れるとその数はさらにふえるのである。従来から定員不足を補ってきた非常勤職員の数もこの間ずっと抑えられたので、結果的にみると図書館改革の実施をかうじて可能にしたのは、法学部図書掛の合併と文・経済両学部から図書出納のために移管された定員のおかげであった。この意味では改革への着手が、改革そのものを救ったということができるであろう。

以上述べたような図書館改革の努力のほかに、他方ではコンピュータ時代の到来とともに、図書館業務機械化への準備も地道に積み重ねられてきた。一九七二年の大阪大学図書館に始まる受入・整理・閲覧業務の本格的な機械化は、その後しだいにこれを採用する図書館の数を増しているが、北大図書館でもすでに一九六八年九月に将来の電算機導入に備えて「機械化検討小委員会」が作られたことがあった。そして一九七四年には事務局に大型計算機が設置されたのを契機に、外国雑誌一括購入について「機械化準備班」を発足させ、一九七六年には新設の学術情報資料掛がこれを引き継いで最初のテストランを行ったのである。

学術情報氾濫時代における研究者の図書館への期待の中には情報検索のための機械化があるが、これは全国的ないしは世界的なネット・ワークによらねば効果は少なく、現状では文献探索は索引誌、抄録誌によって行われている。しかし二世紀目に入った北大図書館が、世界の学術情報をコンピュータを通じて、学内諸部局にオンラインで伝えることもそれほど遠い夢ではないかもしれない。

六 教 養 分 館

附属図書館分室

教養部校舎が現在の北キャンパスに移転する以前には、教養部学生の図書の利用は全面的に附属図書館に依存していた。しかし現在地に移転していろいろ距離が遠くなったので、附属図書館を常時教室の延長として利用することは困難となった。このため、一九六三年（昭和三八）十一月には教養部の教室の一部をさいて附属図書館の分室という形で開架図書室を設けることになり、附属図書館から職員一名を配置し、約二九〇冊の一般図書・指定図書を配架した。座席数は、開架図書室に約九〇席、読書室に約一三〇席（いずれも現在の講義室）であった（この項については教養部史の中で詳述されている）。

教養分館の落成

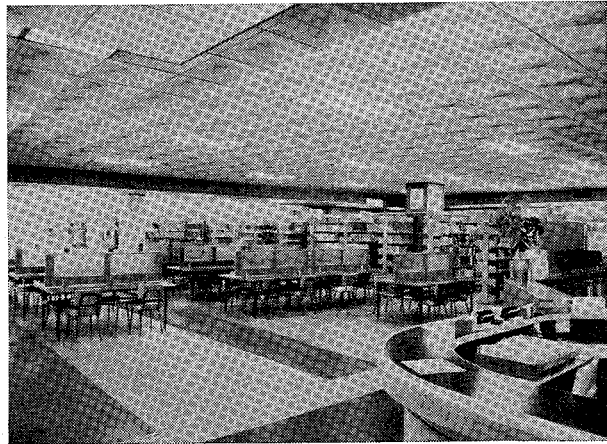
教養分館は組織上は一九六九年（昭和四四）四月一日付けをもって設置されたが、教養部の南側に独立の建物が竣工をみたのは同年十一月のことである。その工事は教養部のバリケード封鎖に始まった北大紛争のさなかに進められたので、落成後の開館も危ぶまれたが、一日も早い学生の図書利用を希望する教養部の意向に従って十二月中旬には開館のはこびとなった。教養部からの図書の移転は、十一月八日の機動隊による封鎖解除後に行われたが、教養部は十二月上旬に再封鎖されたので、開館はタッチの差で間に合ったのである。

新装の建物は鉄筋コンクリート三階建て、総面積二四〇六平方メートルで、一階は管理部門と一般閲覧室（二五二席、二階、三階は開架図書閲覧室（二階一二二席、三階二九六席）にあてられ、二階には一般図書、参考図書、新刊雑誌、三階には教官指定図書が配架された。初代分館長には阿部保教授が就任し、当初の職員数は事務主任以下八名

入館者数（年度別）

	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976
入 館 者	175,092 (280)	193,011 (292)	204,907 (279)	214,376 (278)	258,160 (290)	335,043 (291)	299,405 (281)

注) () 内は開館日数



開架図書閲覧室

で、掛は閲覧掛のみであった。

大学紛争の余燼はその後に残り、一九七〇年（昭和四五）六月には教養分館も二回にわたり封鎖されたが、いずれの場合も大きな被害もなく解除されたのは幸いであった。そして九月からは夜間開館（午後七時まで）も始まり図書館業務もようやく軌道に乗ることになったのである。

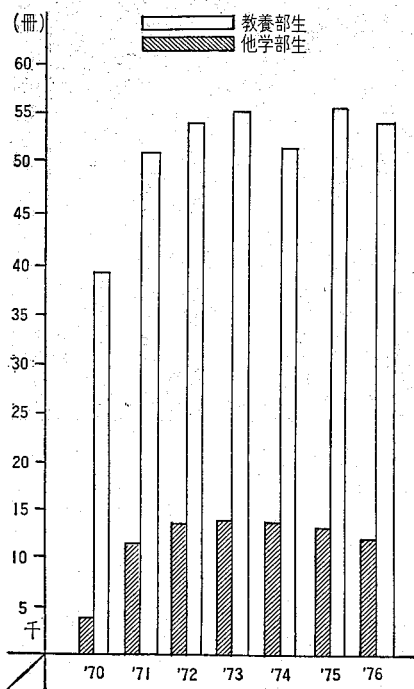
利用者の激増

教養分館は、学習図書館としてそのスペースを可能な

限り閲覧室にあて、座席数四八〇席を確保してきたが、年間入館者は一九七〇年度一七万五〇九二人、翌一九七一年度一九万三〇一一

人と飛躍的に増加を続け、すでに一九七一年（昭和四六）五月の「北海道大学附属図書館報告書」の中でもその狭隘化が指摘され「増築を至急実現したい」旨の要望がなされていた。しかしそれは実現をみないうちに入館者は上表に示すように、一九七五年度には三〇万人を突破するに至ったのである。利用者の増加に伴い図書紛失も多く、管理上はもとより利用者にも不便を与えて放置できない状態となったので、一九七四年（昭和四九）には完全開架式を半開架式

館外貸出冊数 (年度別)



に改めている。

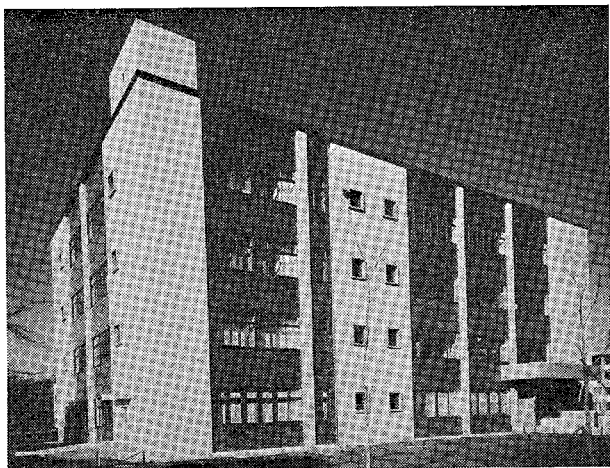
指定図書・参考 図書群の充実

教養分館開館当初は附属図書館から指定図書・参考図書・一般教養書の一部を移管して当面の学習の便宜を図った。その後これらの図書購入費の予算化が進められ、特に一九七〇年度には校費の特別予算配当を受け、一九七二、七三年度に文部省からの特別予算として一六〇〇万円にのぼる指定図書費の配当があり、指定図書、参考図書は飛躍的な充実をみるにいたった。

分館に対する教官の 関心及び利用度の高まり

教養分館当初の設計には教官閲覧室を設けその利用を図ったが、教官用研究図書が収納されていないなどの事情もあって、その利用度は低く関心も薄かった。しかしその後教養部学生の利用の激増、指定図書・参考図書群の増加充実とともに、教養分館は教養部の教育実施に有効・密接な役割を果たしてきた(左表参照)。

教官の教養分館に対する関心も図書の充実とともに高まり、具体的・建設的な分館の機能拡大のための要望書が分館長あてに提出され、分館としても常にその要望に積極的に対応し、教養教育に密接不可分な図書館として成長した。その結果、分館所蔵の参考図書群を利用する希望が教官側から起こり、分館はそのため当面教官閲覧室を暫定的に演習室として利用することとし、一九七一



教養分館全景

年度後期より実施に移した。この方法は臨時に教官閲覧室を演習室として転用しているため室数の不足はもちろんのこと、その設備、構造においても理想的な演習運営ができない状態であるが、すでに教養部の教育の中に定着し、利用希望教官は年々増加の一途をたどっている。

教養分館増築工事完成

前述のように開館以来の教養分館利用の伸びは著しく、すでに建物の狭隘が痛感

されはじめたので、早くも一九七一年（昭和四六）には概算要求の中でその増築が要望され、特に閲覧座席を倍増する計画がたてられた。これは学内の一致した支持により、間もなく認められ、一九七六年十月には増築工事が着手され、翌一九七七年七月竣工した。増築面積は二二九一平方メートル、四階建て（既設三階を四階に）で既設面積と合わせて総面積四六九七平方メートルとなった。増築部分デオ視聴室、演習室などを設けた。完成後の閲覧座席数は、一階一八六席、二階一四四席、三階五七八席と増築前のほぼ倍數となり、教養部学生数の約二〇%の座席数を確保することができた。

フィルム、スライド、VTRなど、機器を使用して行い視聴覚教育はわが国でも早くからとり入れられてきたが、四階の視聴覚設備はこれらを備え、学習効果をさらに高めるための設備である。

〔ビデオ視聴室〕

当設備は個別的な視聴覚教育システムであり、たとえば、ある教師の授業・演習・研究発表会などをビデオに録画したり、研究資料のビデオ化、市販ビデオ教材など多数のソフトウェアを収録、収集したものをビデオ視聴室において学習するためのシステムである。機器として、収納デスク（八席）にカセット式ビデオプレーコーダー、モニターテレビ、ヘッドホンをそれぞれ各席に備えてある。

〔語学演習室（二四席）〕

外国語の習得において、聴覚教材の利用が多大の効果をあげ得ることはすでに実証済みであり、個別学習、グループ学習にそれぞれ利用できる。当設備は一九七七年度末に機器が設置され、一九七八年六月から使用され始めた。

〔演習室（五室）〕

教養分館に所蔵する資料を用いて本学の指導教官が学生に演習する場合に利用できる。各室には視聴覚機器を使用できるように、ビデオテープレコーダー、モニターテレビを用意し、ほかにスクリーンを備えてスライドプロジェクター、オーバヘッドプロジェクターの投映にも利用できるように配慮されている。

あ と が き

「附属図書館史」は、第一、三、四、五節を秋月俊幸、第二節を藤島隆、第六節を船木敏美がそれぞれ分担執筆した。

編集の際に聞き取りなどでお世話になったがたに謝意を表するとともに、故金木藤雄氏（元整理課長）が一九六五年に自費出版された『北海道大学附属図書館史』にも負うところが少なかったことを付記する。

付 録

一 歴代館長・教養分館長・司書官・事務(部)長一覽

歴代館長

新渡戸稻造 書籍館主任
一八九一～一九〇七

原 十太 一八九六～一九〇四

大島金太郎 一八九七～一九〇四
一九〇四～〇五

高岡 熊雄 一九〇五～〇四

上原轍三郎 一九〇四～〇四

松田 武雄 一九〇六～〇五

竹岡 勝也 一九〇三～〇五

高倉新一郎 一九〇五～〇五

風巻景次郎 一九〇七～〇六

武田 信一 一九〇六～〇五

宮崎孝治郎 一九〇五～〇三

酒井 忠明 一九〇三～〇三

今村 成和 一九〇五～〇七

福島 久雄 一九〇一～〇三

早川 泰正 一九〇三～〇七

高嶋 正彦 一九〇七～〇九

塩谷 饒 一九〇九～

教養分館長

阿部 保 一九〇九～〇七

五十嵐三郎 一九〇七～〇三

和田 謹吾 一九〇三～

司書官

柴田 定吉 一九〇六～〇四

高倉新一郎 一九〇三～〇四

事務(部)長

柴田 定吉 一九〇九～〇三

三上 孝正 一九〇三～〇五

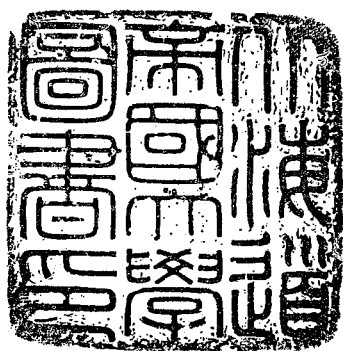
武田 暹 一九〇五～〇四

村田 豊雄 一九〇五～〇六

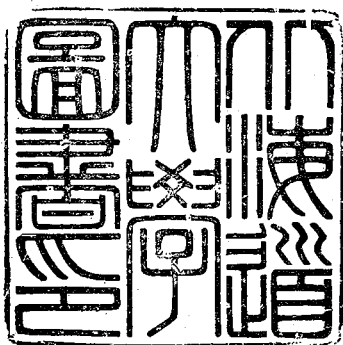
齊木 一郎 一九〇七～〇六

矢部 一郎 一九〇六～

二 蔵書印



北海道帝国大学図書印



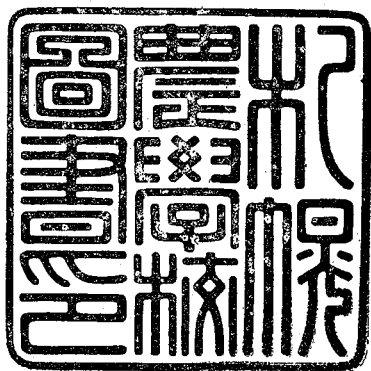
北海道大学図書印



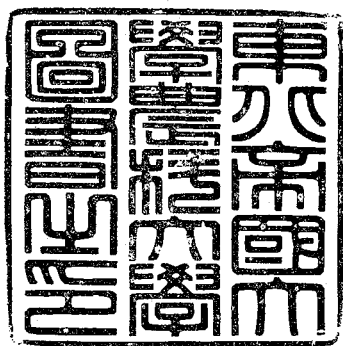
北海道大学図書之印



札幌農学校図書之印



札幌農学校図書印



東北帝国大学農科大学図書之印

三 蔵書数（全部局を含む）

年	和 漢 書	洋 書	合 計	年平均増加
1876 (7月末)	4,362	1,787	6,149	
1877	5,100	3,734	8,834	(2,685)
1888	12,447 (12月末)	6,078 (5月)	(18,525)	(881)
1896	—	—	19,736	(151)
1906	13,821	9,701	23,522	329
1916	25,334	26,126	51,460	2,794
1926	56,667	89,811	146,478	9,502
1936	126,378	176,519	302,897	15,642
1946	217,056	213,681	430,737	12,784
1956	333,060	291,710	624,770	19,403
1966	537,974	465,841	1,003,815	37,905
1977 (3月末)	955,976	763,983	1,719,959	(71,614)
1978 (3月末)	1,020,165	810,809	1,830,974	111,015

(注) 1) 1896～1966年は各々12月末現在

2) 「年平均増加」は、上欄の年からの平均を示す

3) () は参考数

年 表

- 一八七六(明9) 札幌農学校開校式。「書籍室」を有す
- 8・14 講堂とは別棟に建坪十五坪二層の書籍庫を新築
- 一八七六(明10) 書籍庫及び読書房の規則が作られた
- 一八八八(明21) 「札幌農学校洋書目録」を刊行
- 6・10 「札幌農学校和漢書目録」を刊行
- 一八八九(明22) 「札幌農学校和漢書目録」を刊行
- 2・10 書籍庫を増築し、閲覧室と書籍館事務室を設けた
- 一八九〇(明23) デューイの目録規則によりカード目録の作成に着
- 一九〇〇(明33) 手
- 2・ デューイの十進分類法を採用した
- 9・ 現在のキャンパスに白壁の図書館が新築された
- 一九〇三(明36) 札幌農学校の大学昇格に伴い、東北帝国大学農科
- 6・ 大学図書館と改称
- 一九〇七(明40)

- 一九一四(大3) 閲覧室と事務室を増築。電燈を設置し夜間利用開
- 10・20 始
- 一九一八(大7) 北海道帝国大学図書館と改称
- 3・30 「附属図書館」と改称し、館長等の職制を設けた
- 一九二二(大11) 「三階建て延べ七二坪の書庫増築
- 5・15 一 図書館に司書官をおく
- 12・ 一 閲覧室一一七坪の増築工事落成
- 一九二六(大15) 書庫増築工事完成
- 6・15 第一二次帝国大学図書館協議会を本学で開催
- 一九二九(昭4) 文部省主催図書館講習会を本学講堂で開催
- 11・10 大規模の図書館新築計画ができたが実現せず
- 一九三五(昭10) 官制改正により北海道大学附属図書館と改称
- 一九四七(昭22)
- 10・1

- 一九四八 (昭23)
6・5 一 図書館拡充委員会が設置された
- 一九四九 (昭24)
8・31 一 事務長制がしかれ、管理・整理・閲覧の三掛をおく
- 一九五五 (昭30)
4・1 一 整理掛を受入掛と目録掛に分離した
5・ 一 マイクロ撮影機を購入し、翌年より文献複写業務を開始
- 一九五八 (昭33)
8・31 一 図書館の新宮工事着工
- 一九六〇 (昭35)
一 全学的に目録記載を統一し、印刷カードを始めた
- 一九六一 (昭36)
4・1 一 参考掛が新設された
- 一九六三 (昭38)
5・20 一 図書館拡充委員会を改組して図書館委員会を設置
11・ 一 教養部内に附属図書館の分室を置いた
- 一九六五 (昭40)
4・1 一 部課長制がしかれ、二課五掛をおく
6・17 一 図書館新宮工事完了し、落成式を挙行
6・29 一 第一二次全国国立大学図書館長会議を本学で開催
10・1 一 評議会規程改正され、図書館長は評議員となる
- 一九六六 (昭41)
4・11 一 図書館移管の法・文・経三学部図書の出出を始め
た

- 一九六七 (昭42)
1・25 一 図書館機構検討小委員会、事務改善小委員会発足
1・30 一 北海道大学附属図書館報『楡蔭』創刊
- 一九六九 (昭43)
7・10 一 大学紛争の中で一時封鎖された(11・8解除)
12・15 一 附属図書館教養分館が新築され、開館した
- 一九七〇 (昭45)
12・25 一 北海道大学改革検討委員会I―2委員会の審議始まる
- 一九七三 (昭48)
5・16 一 改革検討委員会I―2委員会の最終報告ができた
- 一九七五 (昭50)
4・1 一 法学部図書掛を本館に合併した。閲覧課運用掛が第一、第二の二掛にわかれた
- 一九七六 (昭51)
8・2 一 整理課に学術資料掛が新設された